

## 牧会 40 年、私のネボ山

2022 年 3 月 27 日 佐藤彰

### 苦しみの共有

震災 5 年目だったと思います。ハンガリーの神学校で東日本大震災の話をした時、ウクライナから来た神学生たちが終始涙を流していました。彼女たちはまだ 20 代だったので、チェルノブイリ原発事故は知らないはずですが、けれども、同じ原発事故の痛みを負った国民として、心に苦しみを共有するチャンネルがあるのだと思いました。

あの時泣いてくれたウクライナの人たちが、今泣いています。今度は私たちが涙を流して祈る番です。苦しんだから見える世界がある。悲しんで出会う人がいる。震災やコロナ、戦争に直面しながら、私たちは祈り合い支え合って生きるように促されているのではないのでしょうか。「苦しみにあったことは、私にとって幸せでした。私はそれで、あなたのおきてを学びました。」詩篇 119 篇 71 節

### 苦しみの意味

「主が人の子らを、意味もなく、苦しめ悩ませることはない。」(哀歌 3 章 3 3 節) 預言者ヨナは、荒れる大海原で魚にのまれて神の声を聴きました。私たちも地震や津波、原発事故に遭遇し、神の語りかけを聴いたと思います。

第一は、命の原点です。「あなた生きてたの」と声をかけ合った震災時。何ができるできないではなくて。第二は、人生の理解です。私たちは地上の旅人で人生はプロセスだと。傷ついても立ち上がりスクラムを組む姿を神は見ていたと。第三は教会です。教会堂や役員会が消えても、教会は生きていました。初代教会も迫害の中、葬式や洗礼式、礼拝を行いながら旅をしていたと。

私たちは今、2 年に及ぶコロナ禍に直面していますが、世界はコロナ後の世界に向かって変化していると思います。震災前得た経験や資格は、生きていました。全国に散った教会員から献金が届き、翼の教会は建ちました。震災前教会建設に取り組んだ経験も生きました。震災は私たちにスピードや決断を迫り、私たちは変えられました。現在もコロナ禍で私たちの忍耐力や自制心は醸成され、世界の衛生観念も医療情報のスピーディーでグローバルな共有も、強化されていると思います。

## 人生の四季

この春、私は牧師になって40年を迎えます。幸いなことに教会はよき後継者に恵まれ、リーダーシップは40代と30代の牧師に移譲されました。私はアドバイザー牧師として故郷に眠る幾つかの教会堂を開け、礼拝再開の準備を進めています。11年に及ぶ700キロの旅の終わりは、故郷への帰還でした。「主がシオンを復興してくださったとき私たちは夢を見ている者のようであった」詩篇126篇1節

そうなったのも故郷の放射線量が下がったからですが、電気水道を通し漏電漏水を修理し、ネズミに荒らされた教会内清掃を行なって3月11日の故郷帰還礼拝にこぎつけるのは大変でした。近隣の家々はほとんど取り壊され更地となり、教会が突如姿を顕わした感もあります。もはやかつての古里の景観ではありません。果たしてその先にどんな未来が待っているのか。先は見えませんが、モーセのネボ山と信じて船出します。

ヨブ記には、苦しみの後2倍の祝福があった事が記されています。私たちも思いがけない旅をしましたが、気がつくに移住先のいわきは75年前初代宣教師が「この教会はやがていわきでも伝道する」と指差していた場所でした。知らずして私たちは、宣教師がかつて夢見た未来の中を旅していたのです。その大きな流れの中で震災一年後、教会員が住むアパートが建てられ、翌年には、故郷を向いて羽を広げ礼拝をささげる翼の教会が。3年前は教会員のケアハウスや食堂、サロンを備えたエリムの泉も。合わせると、何と私たちが故郷に置いてきた4つのチャペルと同等の土地建物であったのです。

雲の柱火の柱に導かれ40年旅したモーセの終着点は、ネボ山でした。果たして私のネボ山はどこか。そこからどんな約束の地カナンが見渡せるのか。神の大きな御手に身を任せ、気力体力を見ながら、人生の最終コーナーと思しきネボ山に登ろうと思います。

## 教会の皆様へ

40年の道のりは、長かったような、短かったような気がします。いろんなことがありました。これまで、足りない者を信仰によって受け止め、陰に陽に支えて下さりありがとうございました。よき教会員に恵まれて、ここまで来ることができました。

この教会の牧師であったことが、私の誇りです。

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。

(哀歌3章22節)

アーメン